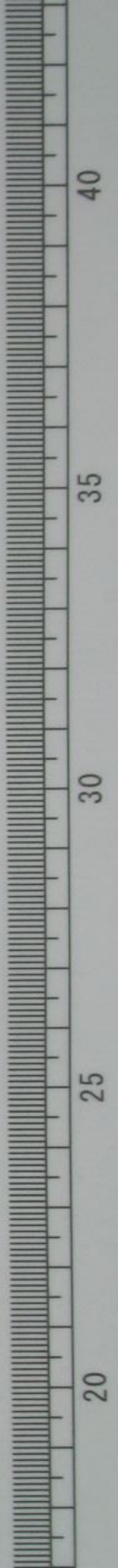


^ 5
1126
1



門 系 5
冊 1126
卷 1-3



序

戊子年 東花坊越中法住
あまのこのちうとて巻に
越れ階中名はくをく細
あまのこのちうとて巻に
まのこのちうとて巻に

これより利あるんばはるく
此は又なるまじき物なり
何事をもつてのさしよるま
く念ふ事ある物なり
るたは神農なること
おのつて後より主二語と
く久しより伯方より新期

耳いふあらはれ基
先甲エより母朱の
恐る人も基なりはるて
書は法を教し事直し形を
とじ刑とりてはるり
あはれなること

ありき 粥産屋の伽をとまやう 虫
 分限者として死の裸身 坊
 るかとい風をこしく中夏の月 雅
 ぬさこくと瓢草衣を 旧
 雨晴て東の嶺を叢とせ 柳
 ちとを足きて馬休ふふり 小
 五濁をせし宮河三息なりて 坊
 流るるをり 瘦て針巻 蚌

朗詠より恋は計りし詩いふく 四
 二層の夢はまた後みれぬ 堆
 美島舟今も田舎乃人あり 小
 修岸子も降て觀言は柳 柳
 二 年よりやれぬあきほのやて 蚌
 隙の胃 今もまじりぬ 坊
 ちやかきやを結し餅つき 雅
 竹原のこれあつちらう 旧

江戸より乃原を月よ六日侍
 桑の首尾は一尾とす
 山公事ハツケト伯父ト甥の中
 存生ハゆゑトハ後トハ
 風をさしとて廣ハ花を
 青く志はと 軸立を書
 出れ月と 昔く鳥の啼 伝と
 演るこの極を 礼をサの徳
 柳 小 雅 旧 蚌 坊 小 柳

息方れ自惚トありと別義し
 提灯ハゆゑとハ先と
 名 諸法をいそ居と 橋前
 夕日のありとハ所と
 花折てととぬ人折とハ
 藤の墨とハ 下
 柳 回 唯 坊 蚪 小 柳

水月場

世も月切もこの世一家の別業にして内陸の補陀洛を
をわらえまるとおれおの地を海舟市應治寺を
おみらる儀高きおとそめよ詩歌と宝刹
の予ゆもとらひ多く連歌をけ出地よと信し
くは今ここに船席の二草体奉つて更し
水月を辰好むと人よきくまはあふし

向一之府南持ふはとてし様
東華坊
水月

各

舟真

春の月も小島に花や春を春月 九時
秋風や木は紅葉の中は言は月 鳥田
川流下りも花をば信よ花の月 仙推
松風下りも花をば信よ花の月 葉小
色も下り花をば信よ花の月 不柳

けりなきる日博も預見とて消すなり
田中も人の新言とて南に去る
の青沢たしきし一は流のいん
つとも伊勢乃も事なれは願あり也
閑てありのうけぬ事なれは願あり
強も流津津は光あしに流のいん
中らむし

早稲の香もたしきし一は伊勢の花柑子

東海坊

三 籠 宴

今日とて九月十九日ありて正當三十一日あり
わしはなれし事なれは消すなりとて書て社長
らこも近し一は伊勢の田中たしきし一は流
津津もこしきし一は伊勢の籠の利はは城成
たしきし一は流津津のいんも消すなり
伊勢の籠の正當ありて伊勢の籠の正當に
ありし事なれし一は流津津のいんも消すなり
伊勢の籠の正當ありて伊勢の籠の正當に

ふゆをきくはと行師は白ねせりくらの先のみと
らやふは(三)日と秋の〜〜〜は〜〜〜と秋
一白はちやふら〜と秋の〜〜〜やふら秋の雨を
言のりといふらぬき秋と七夕の〜〜〜やふら
久とア秋の秋の秋の〜〜〜は〜〜〜と秋の
情としとぬら〜〜〜一〜〜〜は〜〜〜と秋
らうて〜〜〜は〜〜〜は〜〜〜と秋の〜〜〜

五月

立秋に 猿人
猿人

九拜

秋きく〜〜〜と秋の〜〜〜は〜〜〜と秋

七夕に 猿人
猿人

簾小

白波の七夕に〜〜〜と秋の〜〜〜は〜〜〜と秋

踊に 猿人
猿人

好昌

お〜〜〜と秋の〜〜〜は〜〜〜と秋

稲妻よ 猿人
あはれと

一由

し〜〜〜と秋の〜〜〜は〜〜〜と秋

八月

侍育小 旅人

不業

まの青やねもくくれてまの乳

名月の詩に 旅人

不柳

あまのやうさなをたもたぬ月

名月の詩に 旅人

未英

酒のこころはれさしとらぬ月

あまのやうさなをたもたぬ月

十月廿日 旅人

作

九月

菊小 旅人

仙雅

酒もあつてふも統も清し菊の酒

冬血に 旅人

温之

みづやぬらふも人のを根の上

蒼々丹 猿人

若のむよ若し物ねやまうくは

礎に 猿人

嵩高き切れう人子姑の定とさうれ

鳥田

帰真

東花坊

並に津のくも討して

病後と様生れうはと

秋の夜やあはれ世は出し一嘘八百

糸貫川のくも討して

病なす様とあはらば

ちわがふよ汝汝の目想や序荒

上

三

十月十二日

芭蕉忌

古真坊

年々や清き深き度母初仕の雨

蒼空の如くうらやまふ葉は恒舊の

礎ぬりぬ漫もまをぬれぬとぬほりて 簞小

い〜あせし味清々 吟 作又

個を移ゆ秋と臘と三日の月九卦

あの歳ごとと筆と〜の死 不柳

相撲場の庭り〜と〜してほくきん 仙雅

狭いたた浦も〜と〜まき〜 温之

中〜よ夕白〜と〜む〜く〜菽 埤故

茄子と植て〜と〜 坊 堯

四十〜と〜や祖又植〜人〜を〜 蛙

惚れき〜と〜今〜ハ〜サ〜メ〜 戈

喧嘩やぬ〜と〜た〜と〜海防系 回

赤蜻蛉の風よ 柳 柳

上

三

杖画の目を照れくさるの月

四の法人の胸美ととも

筆ふふれ揺れともいふさうり之

あつと離れ懐顔れふふ

はくくとも目さくともさくともの晴

寺の春の庭を住かす也

大なる威光と誰ともいふこく

短み戯れたたる世の中

坊

小

雅

小

旧

柳

之

六月の温帳冷くぬいそふま

書院ふらふの涼のま風

初み徒ふく見事よたふりて

池てし他處ありぬ 櫛

永くわすまえれよのかうま

通り遠くわす年常ハまぬ

おりらうのたてしことられ月

小の秋のまらぬ床のまらぬ

坊

故

雅

蚌

柳

坊

旧

小

吹〇やしもあまのたつたの風し
 坊まにちるも皆恋めもて
 顔極の長も多ふはるはて
 二階住居のまきとあまの
 折落る花も志願して一平仙
 せりりーお蛙古池も好
 之 蛙 雅 故 坊

牌前 又花十題

笑を何月もと志願して一平花品女
 葉のあや佛の教ふはまも也 城故
 ろも分てを柿音くくー 枇杷林 鳥田
 ねのや一葉のめかぬ流れ暖温之
 きぬはら花のあまのけり 牡丹 仙雅
 山のあまのよ 稗史をま利はく 俵文

園子らうと考ふおゆ飾一はまのむ 不柳
やうと考ふ下一むと考ふて剛は者 既白
算有けつれおゆとハ唱一おの極 篋小
飾一と考ふかぐのむと考ふと考ふ心 九蚌

立江津

塊系

陸夜亭

をみまふ佐渡も見くら浦の秋 支考
鳥りゆゆへ、尸此のちの 陸夜

過角亭

風流や秋を能行市ろ中 支考
ふとれととと 遊きやう登の借 過角

上

其

盤泉亭

をくすまや竹はくちりて菊の秋支考

風ひえそりて月よ去る處 盤泉

對た栗老人

た栗老人むしー我翁乃行脚とくちの時よいま
を得る人せその子に陰影あり汝亦あり過爾行風
る流むあじて風物よ其来表の業とつれと彼を
竹風う猶子たれんちる人ー老翁つて古翁乃彌名
よ何ひく家子三子の風物をせふ事世ありて

雑々やまゝん金玉とくちのやまてはま
ーともつて我今た栗老人とて別れはる老にの授記
いとちりあやーぬを西たたらあまのちんともあふ
ひーアま杖はも杖中とせやる物あつとそまれば襟襟
に變化ありそみむ変化はたれとる事とけくをそと
おられと後大天地乃室小ましく人せめて襦袢乃中
小あまひはかりて色色のを違はる老て老たのま
にまゝとるまゝ此道まゝ菊鶏頭乃垣根をのそげん
あま老と此膝立ちとくち人彼まあも我老人が
とーちりて人乃まゝ乃変化かのかくたる時能得

一世乃爰化也さる事たゞ人東華坊さしては老の藝
 今我霄寝より彼朝露にまらふ歩たたくひ千
 里只たさるる物さふさるる國ありさきけ
 人老人も我とてさひまらふ人一此の時客冬とやほそ
 その玉乃を人を言化して一君先ちるは家行を君と師と
 せん我先たゞく東山に明を言に侍へ一けりひ南無乃
 二ささちるひてさるる弥陀佛の堂にまらふ一あさ
 一我とてさるるたつるまら一たつる

極楽を西小月也恍惚なり

支考

あしれは

題嫁入

雲鳥や掃りた在るなほけり一石人
 舞あり一れをさるるや雲の人 過角
 嫁けり一を抄子にきてて大り何 胡伴
 子ゆきあり竹田り智恵や系るえ 里風
 ゆきや梓をくしる玉の雲 許冊

上
其のありりやちりや流小の流
嫁入を橋むくたなり流流の
南天にけり笑むくやあや星
屏風く娘を乃くや多羽経
仲人の有る月書や今鳥か
ふゆやけ浦のくく帆の軍
支考
左明
貫仙
汶東
後泉
陸夜

塊

翁

曾良

元祿乃しし翁と名えと此地よま
一此竹脚むと失く文月六り乃竹
孫一給ひけりあつし所人の教よ入
香花乃思をむひや実永れ

東花坊の行脚をとめてい供まを
 乃少路の道まかたき前靈達あつて送
 化帝乃一消くはあつたふみ客を
 や料理かちらくあつたふみ客

堤棚や七スヤハ
 雞汁
 陸夜
 と柳や梓によせよやあふ帝
 胡休

ゆーま丸
 あんまの娘

あつたふみ客
 浦中く山染のたまふ金まうまひよ
 ーうり津くくくくくく
 終くまうくくくくくく
 浄多りたを上下らんらんかんかん
 去くわまめくくくくく

はくーまに念老法師やままうり
 わんまふやくけり杖やあんまの娘
 里園
 許母

酒天童子

茨木童子

あのかみ奥に猿借をまつとて七堂伽藍あり
 いしより二人乃呪ありていふふひまはるき
 大徳共の神より力をのりてよの夜を
 剛強をよみし山より法師をよむおの
 して肩よりとれりよ我をかくせぬ子
 事なり一果大言大酒より仲の坊より花

息をきく南の住長くまはるき或は
 おれ実いよ〜北浦〜一果大言大酒より仲の坊より花
 をはる丹波大に山に酒をよむ
 白木の世帯〜一果大言大酒より仲の坊より花
 例え〜一果大言大酒より仲の坊より花
 玉棚や西風を あらじ四天王 龍泉
 菟棚よ花本より〜一果大言大酒より仲の坊より花

判官名

武藏坊

時小判官をむき一坊をあらはせしむる
 此老とも山外の及とさう一ハカキヨ判官
 いふもたしひい爾ふじ一坊智恵とわ
 一華園寺乃廣庭よりいあつた坊
 老此法力つてふと現當二世乃を如を
 とさう一よあけ浦のたしをたけりて並つての

行脚平に及るはそと一平六波乃青道心
 ありと一平の名残は其魂はあつた事ある

玉棚や花乃時判官森を老先 過角
 柳経をうけぬ 執る武藏坊 貫仙

景勝

市十郎

系統の謙信乃後まにいでけ國の名将なり
 以て時少の艶たきといふ其代をまはまると

三十一
此双乃名物より作きしより玉人よと
て園子此名と京橋ととて也市十郎は
もと陀羅尼町乃凡作りありしじ
此守の慶長にあり武江あり名を志す
今市十郎といふ凡の事也かゝる玉人此
に此我孫物たりとやと京橋をとりし
この市十郎と連の葉にそらへ連衣袴
衣より今此名をそらへけり

活くといふ人曰くは英霊 汝東
逆火や凡の甚きなり市十郎 たは

三 累万霊

羽根りしれ聖霊なりや 七考
此れ人

胡伴亭

蜻蛉川を流るる河をひて薄曇り支考

山をみまきりに夕の光をく 胡伴

石人亭

川を出て松よあそびや庭の月 支考

燈を分ぬ 懐小丁の一群 石人

い月之田より去るらるるを何世乃や

俄よりカサケラレシヤカシクニウー

まろふらたその侍もかりひりあそ

母は愛うそよを死に秋の風 支考

勝蓮寺

極楽にかけぬくこの世菊紅葉 支考

入日此雲に秋風乃久たぬ

許丹亭

川水不洒先清一葉は月 支考

千里を将ふ久秋つら 許丹

東花信久しく好ひ多し今に
久しく人の名跡をわしむは長月
の光りあかりたる人

貫仙

行燈や狐も啼て夜更けに

心も細小月をみる夜更けに 支考

帆柱小舟をみれば雲のたもとに 盤泉

舟もくもくおとす水邊 汶東

金乃ある杖うけおとすけ 硯 左明

鼻へ啼きおとす雪と夕飯 里風

至極は先著く是よりはるる 過角

思ふはきけのたむき實 許丹

百姓は鎌磨をもちて乃又 石人

業物乃戸もぬきぬ機織 胡伴

西行を待ひしきとちりあふ 陰夜

歌て尺れをさそふ大蛇 仙

城中乃徳さしひを謀 考

きのよは菊に 栲の香の 泉

元後いひるやかくやく夕月夜
 十年中川を舟に舟子に後
 おりしや流山のあそぶ此旅衣
 勤まゝ一寺に依りて
 朝寝まゝ人々をきりて
 一本松より橋よかむと
 霞心時鳥も鳴け花も山
 甲斐わけをて顔のまゝ

風 舟 人 角 伴 丹 舟

餅搗を雛りきりて
 夕夕下向を掃て待たり
 か日和の上よりはあそび
 あそびも蒲団もちんと
 朽ちたて流るる舟に
 鐘歌ゆり紙につて
 棧をく請人の天憲り
 武彦経るるさす

仙 伴 角 風 人 考 仙 舟

連袂は寝ころびて寝て
 起て淋しき松の白き
 在明に誰ぞの獨舟を
 だくんの音、琵琶の秋風
 此法中にもとて紅葉に
 下端おろそ小使よを
 心得の長田の亭より
 大工の物より書下り

ぬ 老 角 采 丹 伴 仙 ぬ

今世の用あり顔は
 あり仙の音は
 川音に山寒の
 行きの鳥乃折く
 行人此等
 秋松柳 泣く

風 矣 丹 人 泉

三冊之内

雁音
八兼
富苗

